

【自著紹介】中村三春『接続する文芸学——村上春樹・小川洋子・宮崎駿』

(七月社 2022 年 2 月)



私が最初に書いた村上春樹論は、『國文學 解釈と教材の研究』1995 年 1 月号の特集「村上春樹 予知する文学」に掲載された「円環の損傷と回復」と題する『風の歌を聴け』4 部作論である。初期から、ほぼ新刊発表ごとにフォローしてきた村上は、当時ただ単に好きな作家であって、金井美恵子や中上健次や村上龍や島田雅彦らに比して特に注目したわけでもなかった。批評家たちも概して村上に冷淡であったが、私としては、この論考がドストエフスキーやプルーストやサルトルや T・S・エリオットを伏線として用いたように、後に世界文学と呼ばれるような本格的な素質を具えた作品であることは当時から意識していた。ただし、そこでも論じた世界の二重構造、メタフィクション性、生と死との同居などの物語論理について、その後はむしろ距離を取って対象化することになる。

本書の第一部をなす「村上春樹」のセクションは、そのような距離化を念頭に書かれたものである。第 1 章「『壁』は越えられるか」は、「中国行きのスロウ・ボート」、「街と、その不確かな壁」それに『騎士団長殺し』を取り上げて、村上小説における人と人との共鳴の困難性を問題とした。それは、僕には居場所がない。君もそうだろう？、と僕が君に求めるのが欺瞞となるような地点である。第 2 章「運命・必然・偶然」は、『スプートニクの恋人』と『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』を俎上に、村上の小説が、いかに偶然の運命を必然と化し、物語のミッシング・リンクを埋める巧みなストーリー・テリングの公理によって支配されているかを見極める。「こちら側」と「あちら側」の存在を物語が描くのではない。逆に、物語が自らを権威ある物語として呈示するために、「こちら側」と「あちら側」なる論理が導入されるのである。第 3 章「見果てぬ『ノルウェイの森』」では、トラン・アン・ユン監督の一般には酷評を被った映画を、原作と照合しつつ論じる。確かに原作の重要な細部を切り捨てて丸めたこの映画が、実はその移動・隠蔽・自己拘束に満ちた映像の造りそのものにおいて、原作にもある、人を愛せないのが常態であるような人が、人を愛するというのはどのような事態なのかを逆説的に明瞭にしたものとして評価したのである。

そして現在、本書の村上論を、その論述の理論とともにさらに発展させた延長線上に、『物語主義 太宰治・森敦・村上春樹』と題する著書を、同じ七月社から刊行する準備を進めている。物語をその構造と意味を対象化し、批判的な距離を取って追究する。物語主義、よい言葉ではないか。

【中村三春（日本文学）】